

「奈良県次世代教員養成塾」の取組と教育効果の検証

—受講生への質問紙調査等の比較結果から—

奈良県立教育研究所教育企画係長	竹村謙司
	TAKEMURA Kenji
奈良県立大学特任教授	石井宏典
(前奈良県立教育研究所副所長)	ISHII Hirofumi
奈良教育大学教授	河崎智恵
	KAWASAKI Tomoe

要 旨

未来の奈良県の教育を担う人材育成を目的として、奈良県教育委員会及び奈良県内に大学法人を置く教員養成系の大学が連携して、平成30年度より高校生を対象とした「奈良県次世代教員養成塾」を新規開講した。開講に先立ち、奈良県教育委員会と奈良教育大学の委員で構成される「次世代教員養成プログラム策定委員会」において、プログラムを検討、作成した。その内容は、奈良県の小学校教員を目指す高校生が、「学ぶこと」の意味を考え、自らの目標を達成するために「学ぶ」行動を起こし、さらにキャリアデザインにつなげていけるものである。平成30年第1期受講生、令和元年度第2期受講生を対象に、本プログラム受講前、受講中、受講後に質問紙調査を実施した。その結果、「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」及び「教職開発力」に関わる項目の向上が見られ、プログラム内容の有効性が認められた。

キーワード： 教員養成塾、高校生、キャリアデザイン

1 はじめに

平成18年に中央教育審議会において、大学における組織的指導体制の整備における基本的な考え方が示された。その中で、大学の学部段階の教職課程が、教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせるものとなるためには、何よりも大学自身の教職課程の改善・充実に向けた主体的な取組が重要であること、今後は、課程認定大学のすべての教員が教員養成に携わっているという自覚を持ち、各大学の教員養成に対する理念等に基づき指導を行うことにより、大学全体としての組織的な指導体制を整備することが重要であることが述べられている（文部科学省、2006）。そして、このような基本的認識に立ち、大学の学部段階の教職課程の改善・充実に図るための5つの方策（教職実践演習の新設・必修化、教育実習の改善・充実、「教職指導」の充実、教員養成カリキュラム委員会の機能の充実・強化、教職課程に係る事後評価機能や認定審査の充実）について提言されている。

こうした新たな時代を見据えた教育、いわゆる次世代型の教育の推進を担う教員養成の一

つの取組として、奈良県では、平成 30 年 10 月から奈良県次世代教員養成塾におけるプログラムを開発・実施している。本研究の目的は、本プログラムの内容と受講生の資質や能力の向上の関係性について考察を行い、効果的な教員の人材育成について検証するとともに、プログラム内容の妥当性を検討することである。研究方法としては、受講前、受講中、受講後に受講生への質問紙調査を実施するとともに、各回の受講後に「振り返りシート」の記入を求め、分析を行った。

2 奈良県次世代教員養成塾について

(1) 奈良県次世代教員養成塾の概要

奈良県次世代教員養成塾は、奈良県教育委員会と県内に大学法人を置く教員養成系大学（畿央大学、帝塚山大学、奈良学園大学、奈良教育大学、奈良女子大学、大和大学）が連携して、奈良県内の高等学校等に在籍する小学校教員を目指す生徒を対象に、未来の本県教育を担う資質・能力を育成することを目的として、高等学校の2年間と大学進学後4年間の6年間を通して継続したプログラムを実施する、全国初の取組である。具体的には、奈良県内の高等学校又は中等教育学校に在籍する生徒を対象とする前期プログラム（以下「前期プログラム」という。）と、大学進学後も継続して実施する後期プログラム（以下「後期プログラム」という。）によって構成されている。

前期プログラムは、奈良県内に大学法人を置く教員養成系大学（畿央大学、帝塚山大学、奈良学園大学、奈良教育大学、奈良女子大学、大和大学）が中心となって講座を運営する。第1期受講生については、平成30年10月から令和元年8月までの月1回程度、原則として土曜日に計10回のプログラムを実施した。第2期受講生については、令和元年10月から令和2年8月までの月1回程度、計10回のプログラムを実施予定である。

本プログラムは、小学校の教員を目指す高校生が、「学ぶこと」の意味を考え、自らの目標を達成するため主体的に学ぶとともに、キャリアデザインにつなげていける内容で構成されている（添付資料1）。前期プログラム修了時点において、各大学で行われたプログラムごとの評価を総合的に判断し、修了認定を行うとともに、修了者に対しては「学校外における学修等の単位認定」制度を活用し、在籍する高等学校において単位を認めることも可能としている。

後期プログラムは、奈良県立教育研究所（以下「当研究所」という。）が中心となって運営し、前期プログラム修了者で教員養成系大学の小学校教員養成課程に在学する学生を受け入れる。大学1、2年次では、社会体験活動、読書活動、インターンシップ、レポート等の活動を行い、その報告書の提出等を中心に実施する予定である。大学3年次では、当研究所での講義・演習を実施し、実践指導力を育成する。大学4年次の4月に後期プログラムの修了認定を行うこととしている。また、更に高い資質・能力の育成を奨励する観点から、後期プログラム修了後、大学院・教職大学院に進学することを奨励する予定である。

(2) 奈良県次世代教員養成塾受講生について

受講生は、奈良県内の高等学校、中等教育学校又は特別支援学校高等部に在籍し、奈良県の小学校教員を志望する生徒を対象としており、以下の目的意識を有する受講希望者に、面接及び書類審査を経て、平成 30 年 8 月に第 1 期、令和元年 8 月に第 2 期の受講生を決定した。

- ① 現在、高等学校 2 学年又は中等教育学校 5 学年であり（4 年制高等学校の場合は 3 学年の生徒）
- ② 奈良県の小学校教員を志望し、大学の小学校教員養成課程に進学後も大学生対象の「後期プログラム」を継続して受講する強い意思をもつ
- ③ 在籍する学校の校長の推薦を受けた者に対して、これからの奈良県の教育を担うために必要な資質や能力（教育観、コミュニケーション能力、情熱・人間性等）を、同じ目標をもつ仲間と共に、講座やその中での交流、体験、振り返り等を通して身に付ける

平成 30 年 10 月から前期プログラムを受講している第 1 期生は、男子 30 名、女子 45 名の計 75 名で、全員が全日制課程の生徒であり、学科別では普通科 70 名、外国語科 3 名、理数科 1 名、商業科 1 名である。普通科の中には、教育系コースに所属する者が 31 名含まれる。また、設置者別に見ると、県立高等学校 56 名、市立高等学校 8 名、私立高等学校 9 名、私立中等教育学校 2 名である。このうち、73 名が前期プログラム修了を認定された。

令和元年 10 月から前期プログラムを受講している第 2 期生は、男子 14 名、女子 28 名の計 42 名で、全員が全日制課程の生徒であり、学科別では普通科 38 名、理数科 3 名、商業科 1 名である。普通科の中には、教育系コースに所属する者が 21 名含まれる。また、設置者別に見ると、県立高等学校 38 名、市立高等学校 1 名、私立高等学校 2 名、私立中等教育学校 1 名である。

(3) 前期プログラムの概要

前期プログラム全 10 回の全てにおいては、以下の視点を導入した。

- ① 高校生のキャリアデザインに資する内容
- ② 各回で受講生に伸ばしたい力を明確にし、その力を付ける内容にし、自ら考え、自らの言葉で表現する（書く、説明する等）活動
- ③ 各回の中に必ず「交流」「体験」「振り返り」の時間の設置
- ④ 「学習者」としての多様な経験が教育観を育むという観点から、「学ぶことの楽しさ」を基盤に「教えることの楽しさ」につながる内容を行うこと
- ⑤ 小学校教員や、教員を目指す大学生と交流する場の設定

表 1 は、平成 30 年度前期プログラム第 1 回から第 10 回の講座における講座のテーマ・概要・実施方法・到達目標について示したものである。令和元年度前期プログラムについても、講座の概要・実施方法・到達目標は、概ね同様である。なお、前期プログラムの具体的なポイント等については、平成 30 年度を添付資料 1 に、令和元年度を添付資料 2 に、それぞれ示した。

表1 各講座の概要・実施方法・到達目標（第1回から第10回）

番号・テーマ・実施日	講座の概要	実施方法	到達目標
第1回 ガイダンス・教職へのビジョン H30.10.6	プログラムにおいて理解した上で、教職への興味・関心・経験を振り返り、目指す教師像についての意見交流及びスピーチを行う。	教職キャリアガイダンスツールの活用や、グループによる意見交流を経て、最終的に1分間スピーチを行う。	自分の目指す理想の教員像について考えをまとめ、プログラムの参加に対する意識を高める。
第2回 人間理解・他者理解を深める H30.11.17	これまでの生活や身の回りの中の「あたりまえ」や「きまり」を見直し、その意義を考えるとともに、自身の考え方を見つけ、生き方を考える。	ワークシートに自分の考えを書いた上で、グループで討議をしたり、小中学生対象の授業を体験したりして、自身の課題に目を向ける。	道徳的価値について、グループ討議などを通して、考え方は多様であることを理解し、自分の見方や考え方、生き方を見つめる。
第3回 郷土を愛することについて H30.12.15	共に生きる社会において、人々の生き方としての文化の意味を考え、グローバル化が進む21世紀、奈良に生きる私たちが世界に向けてどのような文化的な貢献ができるのかを考える。	講義を行った後、グループで討論を行う。討論では、受講生が奈良について調べたことや知っていることを材料として活用するとともに、次世代の世界に向けて奈良の文化が貢献するために、奈良についてどのような探究が必要であるか考える。	奈良県の地域性や特徴についての考えを交流することを通じて、郷土を誇りに思う心を育成することの大切さを理解する。
第4回 外国語とコミュニケーション H31.1.12	小学校英語教育に携わる際に必要となる知識や技能の一部を紹介し、振り返りの中で「教壇に立つまでに自分ができていること、すべきこと」を考える。	受講生同士が交流しながら、英語の発音法を実践し、言語と文化の関係を学び、英語授業を体感した後に、コミュニケーション活動について振り返る。	アクティビティ等を通して交流を深め、外国語を学ぶ楽しさに触れ、外国語教育の必要性を理解するための視点をもたせる。
第5回 先生を目指す私 H31.2.9	教員になるために、さらに伸ばしたい自分の長所、これから身に付けたい資質・能力について考えをまとめる。	現職教員との交流や、グループでの話し合い等を通じて、教員として必要とされる資質・能力やさらに伸ばしたい自分の長所について考えをもつ。	教員になるために、さらに伸ばしたい自分の長所、これから身に付けたい資質・能力について考えをまとめる。
第6回 私も小学生だった H31.4.13	幼い頃の遊びが自分にとってどのような意味があったのかを考えた上で、おはじき遊びのルール作りや紙ヒコーキ作り、紙ヒコーキコンテストに取り組み、その体験を通して様々な遊びの場や形態を理解し、子どもの遊びの指導について考える。	幼い頃の自分の遊びの振り返りとグループでの交流、グループによる実際の遊びの検討と全体発表、体験の振り返りとグループ交流、全体発表、講義による理解、レポート作成等を行う。	小学校6年間の発達特性を自分の成長を振り返りながら考え、子ども達が学ぶ内容は発達に即して定められることを理解する。
第7回 「理科」は好きですか R1.5.11	小学校理科の教材、ゴムで動くおもちゃを作成したり、昆虫の標本のスケッチをしたりして理科を体験する。	おもちゃを作る際の留意点やスケッチの効果について、体験をもとに話し合う。	自然科学を学ぶ楽しさや意義について交流し、学ぶ楽しさを教えるための視点を持たせる。
第8回 短歌・俳句を学び、作ってみよう他 R1.6.22	A 短歌（和歌を含む）と俳句に関し事例を交えて説明する。俳句を作成し、グループ内で作品を見せ合い批評を行う。短歌を作成し全体で発表する。 B 読書指導について説明する。ビブリオトークを体験する。命をテーマにした絵本をグループになって紹介し合う。	二つのクラスに分かれて、90分ずつ交替で二つの講義を受ける。90分で講義と演習を行う。	人文科学や社会科学を学ぶ楽しさや意義について交流し、学ぶ楽しさを教える楽しさにつなげるための視点を持たせる。

番号・テーマ・実施日	講座の概要	実施方法	到達目標
第9回 大学生の間にやっておくべきこと R1. 7. 20	講義を通して大学で身に付けるべき資質能力を知り、若手教員や現役大学生の大学での学びや経験を参考に、受講者間で意見交流をし、自らの大学での目標を具体化する。	大学で挑戦したいことについてグループ内でのプレゼンテーションをし、大学での学びについての講義等を通して考えを深める。	これからの学校にどのような教員が必要かを理解し、学生の間にしておきたい学びや経験・体験等を目標として意識化させる。
第10回 私の理想の先生像 R1. 8. 3	プレゼンテーションを通じて、自らのキャリア意識の成長を確かめるとともに、大学で何を学び何を身に付けるかを明確にしていく。	プレゼンテーション及び10回の講座のまとめを行い、自らのキャリア意識等の深化について考えを交流する。	これまでの学びをもとに、自分の目指す理想の教師像についての変容や、理想に近づくためのライフプランを説明できる。

3 受講生に対する質問紙調査について

(1) 先行研究の概要

河崎（2015）は、初等・中等・高等教育の接続・展開を視野に入れたキャリア教育のモデル構想と教育実践を行っている。具体的には、初等教育から高等教育への「接続」を視野に入れ、ライフキャリアの視点から教職大学院におけるキャリア教育の在り方について検討している。そして、教職大学院におけるキャリア教育において育成されるべき能力領域を明確化し、概念モデルを作成するとともに、その概念モデルに基づき教職大学院カリキュラムを見直し、新たな教育プログラムの開発・実践・質問紙調査による成果の検討を行うことで、今後の課題を明らかにしている。

奈良県次世代教員養成塾においても、初等・中等教育の最終段階である高等学校から開始し、高校の2年間と大学進学後4年間の6年間、更には大学院の2年間も踏まえて継続したプログラムを実施することから、河崎（2015）をもとに、調査研究における分析枠組みを設定した（石井・竹村，2019）。

(2) 質問紙調査の概要

ア 育成能力を測定するための尺度

前期プログラムでは、パーソナリティ・資質に関する内容として、「自尊感情（自己理解能力）」及び「コミュニケーション・多様性理解（人間関係能力）」、学習力・授業力に関する内容として、「学ぶ楽しさを教える楽しさへ（専門的知識）」、キャリアデザインに関する内容として、「キャリアデザイン（キャリア開発力）」の4つを育成能力として示している。

この4つの育成能力を測定するための尺度に関しては、2011年に中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」で示された基礎的・汎用的能力を基盤として設計された河崎（2015）の7次元21項目を参考に検討した。より高次の発達段階で求められる「ケアする力」（他者の成長・発達を支援し社会に貢献・寄与していく力）と、「キャリア統合能力」（職場のみならず生活全体において自らが果たすべき様々な立場や役割との関連をふまえて自己開発とケア（他者支援）の両側面より自己の生き方を考え生涯にわたってキャリアを統合・再統合していく力）の2つを除いた以下の5能力から成る、5次元15項目を設定した（表2）。なお、「教職開発力」も、河崎（2015）では高次に位置付けられているが、前期プログラムにおいて学習力・授業力に関

する専門的知識である「学ぶ楽しさを教える楽しさへ」の育成を掲げていることを踏まえ、採用することとした。実際の質問紙については、平成 30 年度第 1 期受講生質問紙を添付資料 3 に、令和元年度第 2 期受講生質問紙を添付資料 4 に、それぞれ示す通りである。

- ① 「自己理解・自己管理能力」（自己の可能性を含めた肯定的理解に基づき、主体的に行動すると同時に自らの感情や行動を律し自己をマネジメントしていく力）
- ② 「人間関係形成・社会形成能力」（多様な他者の考えや立場を理解し、他者との円滑なコミュニケーションとともに他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力）
- ③ 「課題対応能力」（様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し解決することができる力）
- ④ 「キャリアプランニング能力」（様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら主体的に進路を選択・決定し、その進路に向かって準備・計画していく力）
- ⑤ 「教職開発力」（教員としての仕事や職業に関する諸能力を身に付けるとともに、教員養成の視点から見た自らの職業的能力を開発していく力）

表 2 育成能力を測定するための尺度

次元(上位尺度)	項目(下位尺度)
自己理解・ 自己管理能力	2 自分のことが好きである。 10 毎日の生活が楽しい。 12 自分自身に自信をもっている。
人間関係形成・ 社会形成能力	5 人との調和やルールを重んじている。 7 他の人に対して、誠実であるように心がけている。 9 人とのつながりを大切にしている。
課題対応能力	1 重要な決定の結果、起こっているいろいろな可能性について推察できる。 8 困難な事態に直面したとき、どこに問題があるかすぐに見つけることができる。 11 よりよい解決策を見つけるために、できるだけ多くの情報を集められる。
キャリアプラン ニング能力	3 今後の人生に向かって、準備していることがある。 6 今後の仕事や人生についての展望をもっている。 13 今後の人生に向かって、何か計画している。
教職開発力	4 社会の出来事に絶えず注目し、それを教える内容に活かしたい。 14 「よい授業」「よい教員」を目指して意欲的に取り組みたい。 15 自分自身の実践を振り返り、評価・改善することで自己の教員としての力量を高めた。

※表中の数字は、質問項目番号である。

さらに、前期プログラムで育成する能力・指標と測定尺度との関係を整理すると、表 3 のようになる。「奈良県教員等の資質向上に関する指標」（以下「育成指標」という。）は、平成 30 年 3 月に県教育委員会で承認された。育成指標では、次世代型の教育を推進する教員の育成を念頭に置き、「教員等としての素養」「授業力」「生徒指導力」「マネジメント力」の四つの分野に区分し、教員等の資質向上に関する指標として示しており、特に教員志

望の高校生段階では、「教員等としての素養」の中で「人間力」「情熱」を指標としている。「人間力」については、「豊かな人間性や社会性、教養等を有し、良好な人間関係を構築する力」「状況や目的に応じて、相手の思いを正しく受け止め、自分の思いを適切に伝える優れたコミュニケーション力」「法令や服務規準の遵守の徹底及び高い倫理観や豊かな人権感覚・優れた自己管理能力」を挙げ、「情熱」については、「愛情をもって子どもとの信頼関係を築いている」「教員としての仕事に対する使命感や誇りをもち、責任感をもって職務に当たっている」「子どもの学ぶ意欲や自己肯定感等を高めるため、教員として常に学び続ける向上心を有している」という資質を挙げている。

表3 育成能力及び指標と測定尺度との関係

前期プログラム 育成能力	測定尺度	育成指標における指標
○自尊感情 (自己理解能力)	「自己理解・自己管理能力」	○人間力 ・法令や服務規準の遵守を徹底し、高い倫理観や豊かな人権感覚を有するとともに、優れた自己管理能力を備えている
○コミュニケーション・ 多様性理解 (人間関係能力)	「人間関係形成・社会形成能力」	○人間力 ・豊かな人間性や社会性、教養等を有し、良好な人間関係を構築する力を備えている ・状況や目的に応じて、相手の思いを正しく受け止め、自分の思いを適切に伝える優れたコミュニケーション力を備えている ○情熱 ・愛情をもって子どもとの信頼関係を築いている
○キャリアデザイン (キャリア開発力)	「課題対応能力」	—
○キャリアデザイン (キャリア開発力)	「キャリアプランニング能力」	—
○学ぶ楽しさを教える 楽しさへ(専門的知識)	「教職開発力」	○情熱 ・教員としての仕事に対する使命感や誇りをもち、責任感をもって職務に当たっている ・子どもの学ぶ意欲や自己肯定感等を高めるため、教員として常に学び続ける向上心を有している

イ 研究の流れ

第1期受講生については、前期プログラム開始前の時期である平成30年9月に、質問紙調査を行い、教員としての素養である4つの育成能力「自尊感情（自己理解能力）」「コミュニケーション・多様性理解（人間関係能力）」「学ぶ楽しさを教える楽しさへ（専門的知識）」「キャリアデザイン（キャリア開発力）」について、その時点での実態を把握した。その後、第5回講座修了時の平成31年2月及び第10回講座修了時の令和元年8月にそれぞれ同内容の質問紙調査を行い、4つの育成能力について、前期プログラムを受講してどの程度の向上が見られたかを調査することで、定量的な分析を行う。さらに、各講座終了時に、講座テーマの理解や講座テーマに関する自己の課題、その課題の改善等を記述する「振り返りシート」を記入させ、その記述内容について定性的な分析を行う。第2期受講生についても、前期プログラム開始前の時期である令和元年9月に質問紙調査を行い、第1期受講生と同様の流れで調査を行う。

(3) 結果と考察

ア 質問紙調査の結果

第1期受講生については講座実施前の9月、第5回講座修了時の2月、第10回講座修了時の8月に、第2期受講生については講座実施前の9月、第5回講座修了時の2月に、質問紙調査をそれぞれ行い、「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」「教職開発力」の5尺度、15項目で調査した。

各質問項目について、大学生等を対象としている河崎（2015）では、「大変そう思う」「少し思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「全く思わない」の5件法を採用しているが、本研究では高校生を対象としていることから、肯定否定のどちらでもない中間選択が大きくなり、いわゆる「天井効果」が生じる可能性があることを考え、第1期受講生については、肯定的な回答と否定的な回答の差異を明確にするため、「どちらでもない」を除外した4件法を採用した。集計の際には、「とても思う」を4点、「思う」を3点、「あまり思わない」を2点、「思わない」を1点として得点化した。

第2期受講生については、第1期受講生との比較を行うため5件法を採用し、集計の際には、「とても思う」を5点、「思う」を4点、「どちらでもない」を3点、「あまり思わない」を2点、「思わない」を1点として得点化した。また、統計処理はSPSS（version 21）を使用した。

調査前後における同一測定尺度の平均値の差が統計的に有意かどうかを確かめるために、t検定を行うとともに、5つの尺度に関する質問項目のまとまりについての信頼性を検討するため、 α 係数を算出した。t検定及び α 係数（質問項目の内的整合性を表す指標で、 $-1 < \alpha < 1$ の範囲を取り、1に近い値であるほど測定尺度に関する質問項目のまとまりがよいことを示す）の結果を整理したものが表4-1、表4-2、表4-3である。

表4-1は第1期受講生の第1回質問紙調査（9月）と第2回質問紙調査（2月）を、表4-2は第1期受講生の第1回質問紙調査（9月）と第3回質問紙調査（8月）を、表4-3は第2期受講生の第1回質問紙調査（9月）と第2回質問紙調査（2月）を、それぞれ比較している。

これを見ると、表4-1において、 α 係数については、「教職開発力」を除く4つの測

定尺度に関する質問項目のまとまりにおける信頼性が見られた。t 検定については、「課題対応能力」に関する質問項目 8「困難な事態に直面したとき、どこに問題があるかすぐに見つけることができる。」でのみ得点が有意に向上した ($p < .05$)。これは、各回の講座で受講生に伸ばしたい力を明確に示し、自ら考え、自らの言葉で表現する(書く、説明する等)活動を重視し、必ず「交流」「体験」「振り返り」の時間を設けたことから、「学習者」としての多様な経験を積み重ねる中で、向上が見られたと考えられる。

表 4-2 において、 α 係数については、「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」の 3 つの測定尺度に関する質問項目のまとまりにおける信頼性が見られた。t 検定については、「自己理解・自己管理能力」に関する質問項目 2「自分のことが好きである。」($p < .05$)、質問項目 12「自分自身に自信をもっている。」($p < .05$)、「人間関係形成・社会形成能力」に関する質問項目 7「他の人に対して、誠実であるように心がけている。」($p < .05$)、「課題対応能力」に関する質問項目 1「重要な決定の結果、起こっているいろいろな可能性について推察できる。」($p < .01$)、質問項目 8「困難な事態に直面したとき、どこに問題があるかすぐに見つけることができる。」($p < .01$)、「キャリアプランニング能力」に関する質問項目 3「今後の人生に向かって、準備していることがある。」($p < .001$)、質問項目 6「今後の仕事や人生についての展望をもっている。」($p < .05$)、質問項目 13「今後の人生に向かって、何か計画している。」($p < .05$)、「教職開発力」に関する質問項目 4「社会の出来事に絶えず注目し、それを教える内容に活かしたい。」($p < .001$)、質問項目 15「自分自身の実践を振り返り、評価・改善することで自己の教員としての力量を高めたい。」($p < .05$)で、それぞれ得点が有意に向上した。第 1 回質問紙調査と第 2 回質問紙調査の比較に対して、第 1 回質問紙調査と第 3 回質問紙調査の比較では、すべての測定尺度で得点が有意に向上した質問項目が含まれている。第 1 回講座から第 5 回講座までの講座内容は、「自己理解・自己管理能力」や「人間関係形成・社会形成能力」に関わるパーソナリティ・資質に関する内容であり、様々な受講生と交わる中で、自尊感情やコミュニケーション、多様性理解の困難という内的危機を認知する期間であったと考えられる。第 6 回講座から第 10 回講座までの講座内容は、パーソナリティ・資質に関する内容を踏まえながら、「課題対応能力」や「キャリアプランニング能力」、「教職開発力」に関わる学習力・授業力、キャリアデザインについての内容となっている。教員を目指す自分自身のアイデンティティ(自己同一性)を模索しながら各回の講座を受講する中で、内的危機を主体的に解決していったことが、すべての測定尺度で得点が有意に向上した質問項目が含まれる結果につながったと考えられる。全 10 回の講座の内容構成から、受講生は、螺旋的に、各能力を発達させたことが推察される。

表 4-3 において、 α 係数については、「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「教職開発力」の 3 つの測定尺度に関する質問項目のまとまりにおける信頼性が見られた。t 検定については、得点が有意に向上した質問項目は見られなかった。なお、表 4-1 と表 4-3 を比較したところ、t 検定及び α 係数の傾向に大きな差異は見られないことから、今後の質問紙調査では 5 件法を用いたいと考えている。

表 4-1 測定尺度及び各質問項目の得点の変化（第 1 期受講生：第 1 回、第 2 回調査の比較）

質問項目	N	第1回(H30.9月実施)		第2回(H31.2月実施)		t 値	信頼度係数
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
2 自分のことが好きである。	75	2.68	0.84	2.63	0.82	-0.66	
10 毎日の生活が楽しい。	75	3.27	0.64	3.17	0.72	-1.41	
12 自分自身に自信をもっている。	75	2.55	0.87	2.49	0.78	-0.70	
自己理解・自己管理能力	75	8.49	1.93	8.29	1.97	-1.32	$\alpha=0.738$
5 人との調和やルールを重んじている。	75	3.56	0.53	3.53	0.55	-0.35	
7 他の人に対して、誠実であるように心がけている。	75	3.61	0.49	3.61	0.57	0.00	
9 人とのつながりを大切にしている。	75	3.67	0.50	3.68	0.50	0.28	
人間関係形成・社会形成能力	75	10.84	1.24	10.83	1.23	-0.10	$\alpha=0.751$
1 重要な決定の結果、起こっているいろいろな可能性について推察できる。	75	2.93	0.62	2.96	0.45	0.34	
8 困難な事態に直面したとき、どこに問題があるかすぐに見つけることができる。	75	2.60	0.66	2.81	0.61	2.63 *	
11 よりよい解決策を見つけるために、できるだけ多くの情報を集められる。	75	2.97	0.70	2.97	0.59	0.00	
課題対応能力	75	8.51	1.54	8.75	1.19	1.48	$\alpha=0.671$
3 今後の人生に向かって、準備していることがある。	75	3.13	0.62	3.27	0.64	1.64	
6 今後の仕事や人生についての展望をもっている。	75	3.47	0.60	3.48	0.55	0.19	
13 今後の人生に向かって、何か計画している。	75	3.17	0.69	3.25	0.62	0.92	
キャリアプランニング能力	75	9.77	1.52	10.00	1.48	1.41	$\alpha=0.711$
4 社会の出来事に絶えず注目し、それを教える内容に活かしたい。	75	3.13	0.55	3.31	0.61	1.98	
14 「よい授業」「よい教員」を目指して意欲的に取り組みたい。	75	3.73	0.47	3.71	0.56	-0.47	
15 自分自身の実践を振り返り、評価・改善することで自己の教員としての力量を高めたい。	75	3.75	0.44	3.68	0.50	-1.09	
教職開発力	75	10.61	0.96	10.69	1.28	0.59	$\alpha=0.316$
合計	75	48.23	4.85	48.56	4.75	0.73	

*p<0.05

表 4-2 測定尺度及び各質問項目の得点の変化（第 1 期受講生：第 1 回、第 3 回調査の比較）

質問項目	N	第1回(H30.9月実施)		第3回(R1.8月実施)		t 値	信頼度係数
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
2 自分のことが好きである。	72	2.68	0.85	2.85	0.80	2.04 *	
10 毎日の生活が楽しい。	72	3.25	0.64	3.32	0.75	0.90	
12 自分自身に自信をもっている。	72	2.53	0.87	2.75	0.78	2.28 *	
自己理解・自己管理能力	72	8.46	1.95	8.92	1.91	2.83	$\alpha=0.749$
5 人との調和やルールを重んじている。	72	3.58	0.52	3.65	0.51	0.93	
7 他の人に対して、誠実であるように心がけている。	72	3.64	0.48	3.78	0.48	2.44 *	
9 人とのつながりを大切にしている。	72	3.68	0.50	3.78	0.42	1.98	
人間関係形成・社会形成能力	72	10.90	1.22	11.21	1.10	2.37	$\alpha=0.743$
1 重要な決定の結果、起こっているいろいろな可能性について推察できる。	72	2.96	0.62	3.22	0.54	3.34 **	
8 困難な事態に直面したとき、どこに問題があるかすぐに見つけることができる。	72	2.61	0.66	2.89	0.70	2.91 **	
11 よりよい解決策を見つけるために、できるだけ多くの情報を集められる。	72	3.00	0.69	3.17	0.67	1.65	
課題対応能力	72	8.57	1.51	9.28	1.32	4.21	$\alpha=0.651$
3 今後の人生に向かって、準備していることがある。	72	3.17	0.61	3.54	0.67	4.68 ***	
6 今後の仕事や人生についての展望をもっている。	72	3.47	0.60	3.69	0.52	2.63 *	
13 今後の人生に向かって、何か計画している。	72	3.25	0.64	3.40	0.69	2.46 *	
キャリアプランニング能力	72	9.89	1.35	10.64	1.55	4.54	$\alpha=0.553$
4 社会の出来事に絶えず注目し、それを教える内容に活かしたい。	72	3.15	0.55	3.56	0.60	4.85 ***	
14 「よい授業」「よい教員」を目指して意欲的に取り組みたい。	72	3.75	0.47	3.82	0.48	1.30	
15 自分自身の実践を振り返り、評価・改善することで自己の教員としての力量を高めたい。	72	3.75	0.44	3.86	0.35	2.19 *	
教職開発力	72	10.65	0.94	11.24	0.97	4.68	$\alpha=0.331$
合計	72	48.39	4.84	51.28	4.92	5.89	

*p<0.05、**p<0.01、***p<0.001

表 4-3 測定尺度及び各質問項目の得点の変化（第 2 期受講生：第 1 回、第 2 回調査の比較）

質問項目	N	第 1 回 (R1.9 月実施)		第 2 回 (R2.2 月実施)		t 値	信頼度係数
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
2 自分のことが好きである。	42	3.43	0.86	3.33	0.95	-0.60	
10 毎日の生活が楽しい。	42	4.24	0.79	4.12	1.04	-0.93	
12 自分自身に自信をもっている。	42	3.17	0.93	3.26	0.99	0.53	
自己理解・自己管理能力	42	10.83	1.90	10.71	2.53	-0.33	$\alpha=0.564$
5 人との調和やルールを重んじている。	42	4.38	0.66	4.45	0.63	0.77	
7 他の人に対して、誠実であるように心がけている。	42	4.36	0.73	4.45	0.55	0.78	
9 人とのつながりを大切にしている。	42	4.62	0.58	4.48	0.77	-1.64	
人間関係形成・社会形成能力	42	13.36	1.61	13.38	1.41	0.13	$\alpha=0.744$
1 重要な決定の結果、起こっているいろいろな可能性について推察できる。	42	3.81	0.74	3.86	0.72	0.39	
8 困難な事態に直面したとき、どこに問題があるかすぐに見つけることができる。	42	3.62	0.85	3.45	0.89	-1.05	
11 よりよい解決策を見つけるために、できるだけ多くの情報を集められる。	42	3.79	0.98	3.86	0.90	0.48	
課題対応能力	42	11.21	2.09	11.17	2.05	-0.17	$\alpha=0.744$
3 今後の人生に向かって、準備していることがある。	42	4.05	0.66	3.93	0.89	-0.84	
6 今後の仕事や人生についての展望をもっている。	42	4.33	0.69	4.36	0.76	0.24	
13 今後の人生に向かって、何か計画している。	42	4.00	0.66	4.02	0.87	0.14	
キャリアプランニング能力	42	12.38	1.53	12.31	2.09	-0.22	$\alpha=0.636$
4 社会の出来事に絶えず注目し、それを教える内容に活かしたい。	42	3.95	0.88	4.07	0.78	0.93	
14 「よい授業」「よい教員」を目指して意欲的に取り組みたい。	42	4.74	0.59	4.71	0.51	-0.24	
15 自分自身の実践を振り返り、評価・改善することで自己の教員としての力量を高めたい。	42	4.79	0.42	4.71	0.51	-0.83	
教職開発力	42	13.48	1.47	13.50	1.29	0.11	$\alpha=0.679$
合計	42	61.26	5.59	61.07	6.15	-0.21	

イ 振り返りシート調査の結果

受講生の質的な変容を見るため、各講座時に、添付資料 5 にある「振り返りシート」を作成させ、講座内容の振り返りを行った。記述内容としては、「講座テーマの理解」「講座を通しての他者との交流等」「講座テーマに関する自己の課題」「自己の課題の改善」「学ぶことや教えることの楽しさ」「講座内容の進路実現への活用」等となっている。表 5-1 は、第 1 期受講生の第 1 回質問紙調査（9 月）と第 3 回質問紙調査（8 月）の比較における α 係数で、質問項目のまとまりにおける信頼性が見られた測定尺度である「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」について、それぞれ特徴的なものを事例 1 から事例 3 として取り上げたものである。各尺度の得点が 3 点以上増加もしくは減少した者（○が増加、▲が減少）を抽出している。

一方、「キャリアプランニング能力」「教職開発力」については、質問項目のまとまりにおける信頼性が見られなかったが、質問項目別にみると、t 検定において得点が有意に向上したものがみられた。「今後の仕事や人生」「よい授業、よい教員」に関する質問項目が、高校生段階において内的整合性を持つかどうかを検討する必要があるだろう。なお、表 5-2 は、「キャリアプランニング能力」「教職開発力」について特徴的なものを事例 4、事例 5 として取り上げたものである。事例 1 から事例 3 と同様に、尺度の得点が 3 点以上増加もしくは減少した者（○が増加、▲が減少）を抽出している。

表 5-3 は、第 2 期受講生の第 1 回質問紙調査（9 月）と第 2 回質問紙調査（2 月）の比較における α 係数で、質問項目のまとまりにおける信頼性が見られた測定尺度である「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「教職開発力」について、それぞれ特

微的なものを事例1から事例3として取り上げたものであり、表5-4は、「自己理解・自己管理能力」「キャリアプランニング能力」について、特徴的なものを事例4、事例5として取り上げたものである。どちらの表も、各尺度の得点が3点以上増加もしくは減少した者（○が増加、▲が減少）を抽出している。

さらに、講座ごとに「講座の内容の理解」「講座の目標の達成」「進路実現への活用」の3項目について、「講座の内容の理解」においては「深まった」「概ね深まった」「あまり深まらなかった」「深まらなかった」、「講座の目標の達成」においては「達成できた」「概ね達成できた」「あまり達成できなかった」「達成できなかった」、「進路実現への活用」においては「活用できる」「ほぼ活用できる」「あまり活用できない」「活用できない」の4件法で、それぞれ調査を行っている。図1-1、図1-2、図1-3にあるように、第1期受講生、第2期受講生とも、3項目について、講座の回数を重ねるごとに肯定的な回答の割合は上昇しており、これまでの講座の内容を踏まえて、次の講座に臨んでいるという意識の高さが見られ、実施した各講座の内容や配列は概ね適切であったと考えられる。

表5-1 振り返りシートの記述から見える「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」に対する意識変容（第1期受講生）

<p>事例1：「自己理解・自己管理能力」</p> <p>○キャリアエッセイを通して、それぞれの考えや思いを話し合う「交流」、それらをまとめて発表する「体験」、今までの講座も含め、自分の変化やこれからのことを見つめ直す「振り返り」がありました。今までのそれぞれ学んだことの振り返りを通して、自分がどのように変わったのか、自分がこれからしたいこと、すべきことは何なのかを理解できました。</p> <p>○10回の講座を通して、仲間とともに成長することができ、自分はとても恵まれた環境の中で学ぶことができていると改めて実感しました。私はこの講座で自分に自信が付き、心の中で大きな変化がありました。感謝の気持ちでいっぱいです。後期プログラムもぜひ受講したいと強く思いました。</p>
<p>事例2：「人間関係形成・社会形成能力」</p> <p>○グループミーティングのとき、「一体感が出てきた」という私の意見に対して、一人一人がコミュニケーションの大事さを実感し、意識するようになったことが影響しているのではないかという意見をもらい、とても印象的でした。10回の講座を通して、よい経験ができた実感した瞬間でした。</p> <p>▲当たり前のことやきまりについて考え、特に、自分の当たり前は他人の当たり前ではないことを再認識しました。これまでを振り返ると、迷惑をかけていたと感じる部分があり、もう一度自分を見直して、周りに気を配れる人間にならなければと感じました。</p>
<p>事例3：「課題対応能力」</p> <p>○子どもの目線や教員の目線、そしてそれを目指す自分の視点、あらゆる方向から物事を観察し、理解した後それを応用して教える力、これらを、これからの講座、大学での授業、日頃の生活から磨いていきたいです。</p> <p>○人前で話すときに緊張で下を向きがちだから、みんなの顔を見て情熱的に話せるようになりたいと思いました。また、人に伝える機会が増えていく中で、考えを分かってもらうために、語彙力を養いたいと強く思いました。本を読んだり、あらゆる人とコミュニケーションを積極的にとったりしていきたいです。</p>

表5-2 振り返りシートの記述から見える「キャリアプランニング能力」
「教職開発力」に対する意識変容（第1期受講生）

<p>事例4：「キャリアプランニング能力」</p> <p>○キャリアエッセイを基に話し合い、発表する体験や班での交流を行うことで、自分の考えを振り返るきっかけになりました。講座を通して、一年前に比べるとライフプランは明確になりましたが、これからさらに大学でしっかりと行動に移していきたいです。</p> <p>○この講座を受ける前は深く考えたことのなかった理想の教師像が、10回の講座を通してだんだんと明確になりました。長所は長所のまま、短所は長所として捉えることが分かりました。具体的に見えてきた自分のなりたい教師像に向かって、自分に必要なことをどんどん身に付けていきたいと思います。</p>
<p>事例5：「教職開発力」</p> <p>○遊びの中に学ぶことがたくさんあって、気付きがあったり創造力を付けたりできるのがおもしろかったです。集団で協力したり、学年に応じて適切な指導をしたり、相手も分かるような言葉で説明することが大切だと分かりました。</p> <p>○絵本からも多くのことが学べます。そして、それを相手に伝えることの難しさを痛感しました。物語一つでも、その人の思い入れによっては宝石にも石ころにもなります。本が大好きだと言ってくれるような子ども達のいるクラスを持ちたいと思いました。</p>

表5-3 振り返りシートの記述から見える「人間関係形成・社会形成能力」
「課題対応能力」「教職開発力」に対する意識変容（第2期受講生）

<p>事例1：「人間関係形成・社会形成能力」</p> <p>▲講座の中での交流で、自分が思っていない意見が次々と出てきてびっくりしました。小学校教員を目指す上で、自分の課題は伝える力や質問する力です。普段から、積極的に質問していきたいと思いました。また、一人で学ぶより、みんなで学ぶ方が色々な意見が出てくることが分かりました。</p>
<p>事例2：「課題対応能力」</p> <p>○絵を見てよく話し合ったり意見を出し合ったりしますが、自分と違う視点でのものの見方は、自分の改善点を見つけることができ、より自分を高めることができました。自分の考え方や感じ方で物事を進めるのではなく、たくさんの人と交流し、意見交換をし、自分とは違う意見をおもしろいと思うことが大切だと思いました。</p> <p>▲英語を子ども達に教えるのは難しいことだと思いますが、教えた表現や単語を子ども達が使ってくれたときはうれしいと思います。実際に教員になって、この講座で学んだことを自分なりに解釈して教えるときに、学びが広がる瞬間になると思います。</p>
<p>事例3：「教職開発力」</p> <p>○子ども達に「楽しい授業」と思ってもらうには工夫が必要であり、今習っている学校の先生がどのように工夫しているかを、意識して見たいと思いました。また、現職の先生から、子ども達が「分かりやすかった」「楽しかった」と言ってくれたときにやりがいを感じると聞いて、自分も体験してみたいです。</p> <p>▲今、自分自身が教師についてどんなことに興味・関心があるのかを考えさせられる貴重なきっかけとなりました。どんな場面で役立つのかなど、たくさん考え、理解することができました。また自分の傾向を調べることで、今、自分が将来教師になるために、どのようなことをすべきなのかを理解することができました。</p>

表5-4 振り返りシートの記述から見える「自己理解・自己管理能力」
「キャリアプランニング能力」に対する意識変容（第2期受講生）

事例4：「自己理解・自己管理能力」
○自分自身、情緒不安定な面があることを自覚しているので、直さないといけない点だと思いました。子どもはとても鋭いと思うので、不安定になって影響を与えたくはないです。でも今不安定なのはよいことだと言ってもらえたのが、うれしかったです。
▲教員になるためには、まず教員について理解することが必要だと分かりました。教員になるまでに、まだまだ長い過程がありますが、今できることを常に考え行動することが、今の私には必要であることが分かりました。今受けている授業にもっと関心を持ち、授業を受けようと思いました。

事例5：「キャリアプランニング能力」
○実際に小学校の先生の話聞くことができる機会はあまりないので、よい経験ができました。自分が小学校へ実習で行ったときに、「こうしていたらよかった」と思った部分があったので、今回の講座（第5回）で学んだことを生かし、子ども達一人一人のことを考え、笑顔を心がけたいです。
▲今回の講座（第1回）を受けて、「教師を目指す」という気持ちが強くなりました。また、自分のことについて知ることができました。小学校教員を目指す上で、物事に動じない力や忍耐力などを伸ばしていくことが自分の課題なので、周りの意見や反応に左右されず、部活動などで積極的に声かけをしていくことが改善につながると思いました。

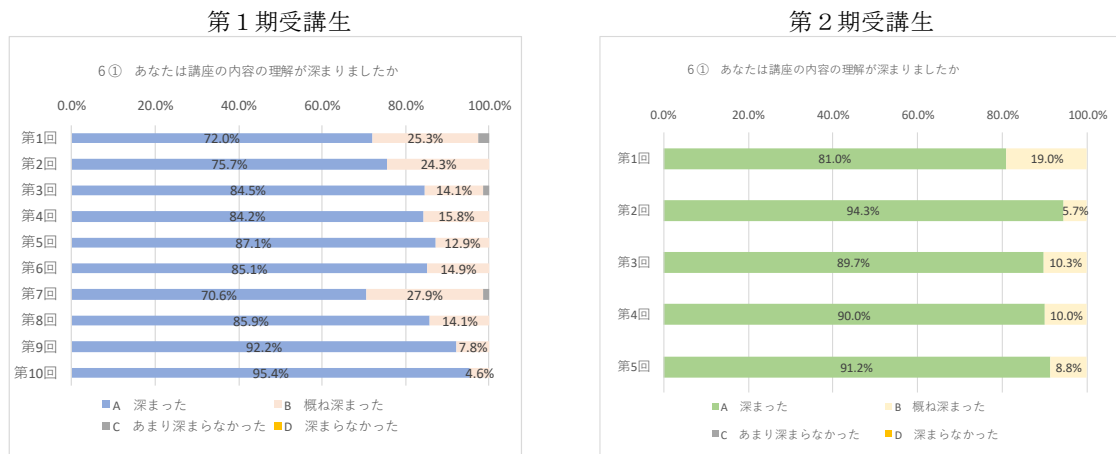


図1-1 「6① あなたは講座の内容の理解が深まりましたか」

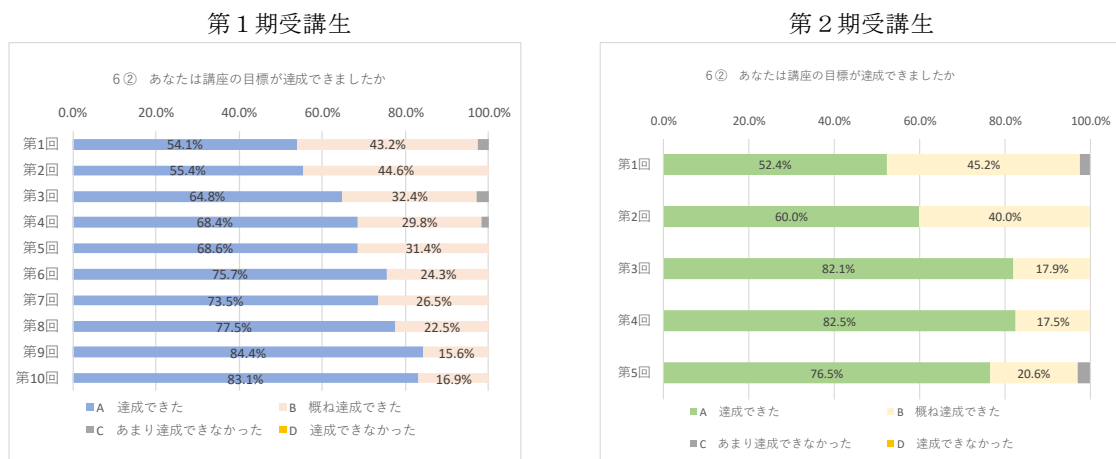
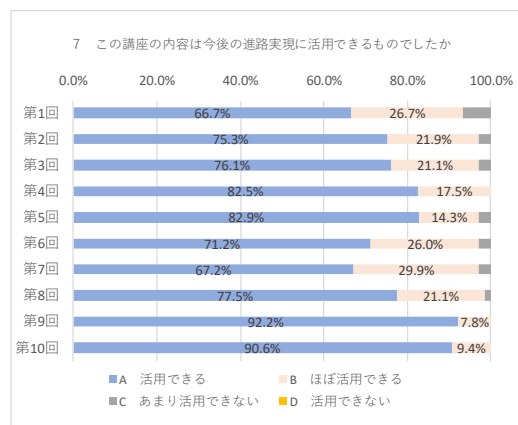


図1-2 「6② あなたは講座の目標が達成できましたか」

第1期受講生



第2期受講生

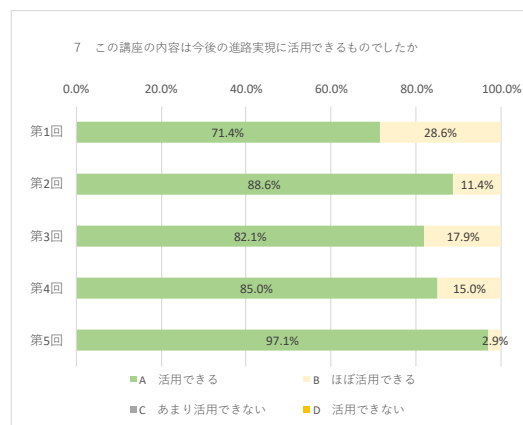


図1-3 「7 この講座の内容は今後の進路実現に活用できるものでしたか」

ウ 分析結果の考察

表4-2の質問紙調査結果から、第1期受講生については、「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」及び「教職開発力」の各測定尺度において、得点が有意に向上した項目が見られた。

表5-1にある尺度の得点が上昇した者の振り返りシートにおいて、事例1で「自分がどのように変わったのか、自分がこれからしたいこと、すべきことは何なのかを理解できました。」「私はこの講座で自分に自信がつき、心の中で大きな変化がありました。」の記述があり、自らの変容に気付き、何をすべきかを理解していることから、「自己理解・自己管理能力」の向上につながっていると考えられる。事例2で「一人一人がコミュニケーションの大事さを実感し、意識するようになったことが影響しているのではないかという意見をもらい、とても印象的でした。」という振り返りシートの記述からは、周りの意見を受け入れ、自分自身の考えを昇華させている姿が読み取れ、「人間関係形成・社会形成能力」の向上につながっていると考えられる。事例3で「子どもの目線や教員の目線、そしてそれらを目指す自分の視点等を、これからの講座、大学での授業、日頃の生活から磨いていきたいです。」「人に伝える機会が増えていく中で、考えを分かってもらうために、語彙力を養いたいと強く思いました。」という振り返りシートの記述からは、課題に対して具体的で現実的な対応方法を述べていることから、「課題対応能力」の向上につながっていると考えられる。表5-2において、事例4で「一年前に比べるとライフプランは明確になりましたが、これからさらに大学でしっかりと行動に移していきたいです。」

「具体的に見えてきた自分のなりたい教師像に向かって、自分に必要なことをどんどん身に付けていきたいと思います。」という振り返りシートの記述からは、今後のライフプランや具体的な教師像について述べていることから、「キャリアプランニング能力」の向上につながっていると考えられる。事例5で「集団で協力したり、学年に応じて適切な指導をしたり、相手も分かるような言葉で説明することが大切だと分かりました。」「本が大好きだと言ってくれるような子ども達のいるクラスを持ちたいと思いました。」という振り返りシートの記述からは、実際の学校現場における教員の活動をイメージしていることから、「教職開発力」の向上につながっていると考えられる。

一方、第2期受講生において、表4-3の質問紙調査における測定尺度である「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の平均値が低くなっていた。このことについては、各回の講座で「交流」「体験」「振り返り」の時間を体験し、周りの仲間と関わり、自分自身を振り返る中で、自分自身のパーソナリティや課題を解決する力を高めていくことや、教員としての人生に向けての準備が必要だと考えている段階であると推測される。

尺度の得点が減少した者の振り返りシートを見ると、表5-3において、事例1で「教員になるまでに、まだまだ長い過程がありますが、今できることを常に考え行動することが、今の私には必要であることが分かりました。」という記述からは自分自身の課題意識の明確化が、事例2で「英語を子ども達に教えるのは難しいことだと思いますが、実際に教員になって、この講座で学んだことを自分なりに解釈して教えるときに、学びが広がる瞬間になると思います。」という記述からは課題を解決する力を高めていくことが、事例3で「小学校教員を目指す上で、物事に動じない力や忍耐力などを伸ばしていくことが自分の課題である」という記述からは教員としての人生に向けての準備が、それぞれ必要と感じている姿を見て取ることができる。したがって、こうした受講生においても、小学校教員という明確な将来像を描き、その実現に向けたキャリアデザインが意識されているものと思われる。

4 おわりに

本稿の目的は、奈良県次世代教員養成塾におけるプログラム内容と受講生の資質や能力の向上の関係性についての考察を行うことで、効果的な教員の人材育成について検証するとともに、プログラム内容の妥当性を検討することであった。

プログラム実施前後における受講生への質問紙調査の比較及び記述を分析したところ、「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」及び「教職開発力」の各測定尺度において、得点が有意に向上した項目が見られ、プログラム内容の有効性が認められた。今後は各測定尺度や項目の分析を詳細に行うことで、プログラム内容の更なる改善に活用していきたい。

令和2年6月からは、第1期受講生のうち前期プログラム修了者で教員養成系大学の小学校教員養成課程に在学する学生に対して、後期プログラムを実施予定である。大学1、2年次では、社会体験活動、読書活動、インターンシップ、レポート等の活動を行う予定であるが、前期プログラムで目指したキャリアデザインの視点を踏まえるとともに、大学での学びとつながる、より効果的なプログラム内容を検討していくことが課題と考える。

今後、第3期生以降も含めた受講生を調査対象として、高等学校2年、大学4年、大学院2年の期間にわたるパネルデータを収集し、継続的な調査研究を行いたいと考えている。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費（JP15H03500, JP19H01672）の助成を受けて実施した。また、本研究の実施に当たっては、次世代教員養成プログラム実行委員会をはじめ、プログラム担当者（授業者）の先生方及び関係者の皆様に多大な協力を得るとともに、査読者の皆様より貴重な助言をいただいた。ここに改めて感謝の意を表す。

参考・引用文献

- 石井宏典、竹村謙司（2019）「次世代型教員養成の在り方に関する予備的考察 ―高校生を対象とする奈良県次世代教員養成塾受講生への質問紙調査等の結果から―」奈良県立教育研究所平成 30 年度研究紀要 pp. 32-43
- 河崎智恵、吉村雅仁、中井隆司（2015）「教職大学院におけるキャリア教育のモデル構想と教育実践 ―初等・中等・高等教育の接続・展開を視野に入れて―」日本教育大学協会研究年報第 33 集 pp. 63-74
- 河崎智恵（2010）「ライフキャリアの能力・態度に関する尺度構成の試み」キャリア教育研究 29 巻 1 号 pp. 25-30
- 文部科学省（2006）中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」
- 文部科学省（2011）中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
- 文部科学省（2017）「教育公務員特例法等の一部を改正する法律等の施行について」
- 奈良県教育委員会（2018）「奈良県教員等の資質向上に関する指標」
(<http://www.e-net.nara.jp/kenkyo/index.cfm/17,1229,c,html/1229/ikuseisihyou1129.pdf>)